Gallery of The Fine Art Laboratory

拝啓 時下ますますご清祥の事とお慶びを申し上げます。
この度、9月5日（木）から9月23日（月）まで、武蔵野美術大学「Gallery of The Fine Art Laboratory」にて、ちばふみ枝「いくつかの波間」展を開催いたします。是非ご高覧いただきたく、ご案内申し上げます。

【開催概要】
会期：2024年9月5日（木）～9月23日（月）11：00～17:00　日曜休廊（9月16日・23日の祝日は開廊）
会場：Gallery of The Fine Art Laboratory
　　〒187-8505　東京都　小平市小川町1-736　武蔵野美術大学2号館1階
主催：Gallery of The Fine Art Laboratory（彫刻学科研究室企画　問い合わせ先：042-342-6055）

※9月5日（木）15：00より2号館202にてアーティストトークを行います。

# ちばふみ枝「いくつかの波間」

ここ数年、家によく人が訪れてくれるようになった。その「家」とは、2011年の津波によって1階天井上まで浸水した元実家だ。直後の応急修理として窓と玄関を入れなおし、2階部分には電気水道ガスを引きなおしている。内側の損傷と比べて目立った外傷は少なく、現在は自分の制作場所兼倉庫のような形で使用しており、そんな「家」をわりと多くの人が見学に来てくれた。

「家」に足を踏み入れた人たちは、目の前の「家」と各々の家の記憶とを重ねて見ているようだ。自分の家、祖父母の家、一般的な家、廃屋と定義されるような家、その他、家から想起される諸々。そこには、「家」の欠損を埋め合わせるためのイメージにとどまらない積極性があるようだった。人の身体ごと受け入れる性質をもっている「家」が、見られるだけではない、見る者と「家」との相互性を含む独自の関わりを生じさせているのではないかと思えた。私は小2から高3まで暮らし、帰省の度に自室を使用していたその家を重ねて見ている。

この家には波の音が届く。寄せては引いてを繰り返す波は、降り続き地に吸い込まれ続ける雪や、浮かんでは重なり消える記憶の断片の在りように似ているなあとよく思う。例えば、津波で運ばれてきた砂浜の砂と防風林の松葉が残る室内。震災後に聞いた、当日「家」で過ごすことができなかった父の雪の話。「家」には暮らしがあり、津波で破損した傷があり、現在の時間があるということ。ここで目にし、言葉にし、作品にしてきたいくつかのことが頭をよぎる。連続する時間による出来事の重なり合いが波に似ているとしたら、その「間（ま）」に立って、何が見えているのかを話したり聞いたりしたい。

ちばふみ枝

【作家略歴】

ちばふみ枝/Fumie Chiba

宮城県石巻市出身・在住。
武蔵野美術大学大学院を修了後、都内を中心に作品を発表。2011 年、東日本大震災を機に U ターン。現在はアーティスト・ラン・スペースである「石巻のキワマリ荘」内に小さなアートスペース「mado-beya」を構え、拠点として活動している。

1981 年　宮城県石巻市生まれ
2004 年　武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
2006 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース修了
2020 年　アートスペース「mado-beya」設立
2021 年　有志団体「石巻アートプロジェクト実行委員会」発足

【個展】
2023 年「waves」GALVANIZE gallery/宮城
2021 年「くすんだベール 2011 - 2021」GALVANIZE gallery/宮城
2021 年「いくつもの小さな広場」Cyg art gallery/岩手
2020 年「遠い庭」GALVANIZE gallery/宮城
2017 年「serendipity」GALVANIZE gallery/宮城
2013 年「くすんだベール(巡回展)」黄金町 1-1 スタジオ/神奈川
2012 年「くすんだベール」日和アートセンター/宮城
2009 年「四姉妹」ギャラリーQ/東京
2007 年「とどまるぬいぐるみはおしゃべりをせず」switch point/東京
2006 年「レインボーフラワー」ギャラリーエス/東京

【主なグループ展】
2023 年「〈震災の記憶をめくる〉2023」喫茶 frame/宮城
2022 年「手つかずの庭 2022」石巻のキワマリ荘/宮城
2022 年「常設展 - ヒトノカタチ - 」Cyg art gallery/岩手
2021 年「フェスティバル FUKUSHIMA！2021」四季の里/福島
2021 年「手つかずの庭」石巻のキワマリ荘/宮城
2020 年「MOLE GALLERY - MOLE COLLECTION 2020 -」Cyg art gallery/岩手
2017 年「日常一会」ギャラリーチフリグリ/宮城
2016 年「日常一会」ギャラリーチフリグリ/宮城
2015 年「日常一会」ギャラリーチフリグリ/宮城
2013 年「石巻四次元横丁」日和アートセンター/宮城
2013 年「Shared Lines」Canterbury Museum/Christchurch
2012 年「exART_NE」ギャラリーチフリグリ/宮城
2012 年「バックトゥザフューチャー」ギャラリーチフリグリ/宮城
2011 年「画廊からの発言'11 小品展」ギャラリーなつか b.p/東京
2011 年「上昇気流'11」SILVER SHELL/東京
2010 年「Kawaii 賞」入選｜西武渋谷店/東京
2010 年「扉のむこう側」バートックギャラリー/東京
2010 年「The 2nd COREDO Women's Art STYLE」コレド日本橋/東京
2006 年「ニュー･アート･コンペティション of Miyagi」入選｜仙台メディアテーク/宮城
2006 年「SAA-教務補助作品展-」武蔵野美術大学/東京
2004 年「レイノモノ」武蔵野美術大学/東京

【芸術祭】
2019 年「Reborn-Art Festival2019」/宮城

【展覧会によせて】

しまっておいた物

「しまっておいた物」を外に出した時に、改めてあの時から今までが地続きだということに気付いたりする。それにしても、なぜ作品の中にカーテンがあるのだろうか。ずいぶん昔、震災よりも前の話だ、ちばの作品のカーテンに気付いたのは。作品の特徴であるレリーフ状の書き割りのようなコンストラクションは、ちばが作品を発表した初期から続いている。リアルなスケールと絵画的なイリュージョンが相乗して、見ている側も自分自身のスケールを忘れてしまいそうになる空間だ。カーテンは芝居の幕間のようでも、様々な記憶の奥にあるものを開ける衝動のようなものかもしれない。子供の頃から始まる「しまってあった記憶」の波間は、ちばのものでもあるが、誰もが持っている記憶とも干渉する。

「彫刻」はそもそも「出しっぱなし」だ。設置してからの付き合い方こそが問題なところがあるからだろう。過去とどのように地続きなのかをみんなで確認する役割があるのかもしれない。しかし、ちばふみ枝の作品は、しまっておける。プライベートなものではなく、みんなで見続けることを前提とした「しまっておける彫刻」なのだ。見るたびに記憶が覚醒することは大切なのだが、さらに、それまで気づかなかったことも、ここには現れるかもしれない。そのための「覚醒装置」のようなものがカーテンかもしれない。

「家」の窓の向こうには海があるという。そこにカモシカがやってくるそうだ。どんな匂いがするのだろうか。人間の感じるカモシカの匂いというよりも、カモシカになって感じる海の匂いのようなものが窓から見えるのかもしれない。

伊藤誠

《家族劇場》
2019 年
h1570×w900×d820 mm
MDF、アクリル絵の具、布、A4 額装イメージプリント 2 点

《ゆき－道ばた》
2021 年
h525×w280×d290 mm
MDF、アクリル絵の具、布

《くすんだベールの干渉》シリーズ
2021 年（撮影年：2011 年）
額装写真（A4、6 切、2L）

《海とカモシカ》シリーズ
2020年（撮影年：2019年）
インクジェットプリント

個展「waves」2023 年／GALVANIZE gallery